

# もういくつねると…

主を待ち望め。慈しみは主のもとに  
 豊かな贖いも主のもとに

詩編 130 編7節（日本聖書協会『聖書 新共同訳』）

「お正月、お正月には……」。凧をあげたり、コマをまわしたりすることは、今も苦手ですが、この歌を口ずさむ時、お正月の到来を待ちわびた子ども時代を思い出します。

この時期、お正月だけでなく、「もういくつねるとクリスマス」でもあります。とは言え、今や、クリスマスを、お正月を、子どもたちは、そしておとなたちも、果たして指折り数えて待ちわびているのでしょうか。

待たなくてもよい社会になってしまいました。待つ必要のない社会を作り出したのです。その結果、待つことができない社会になりました。夜の闇の中、ひもじい思いをこらえて、まんじりともせず朝を待つ必要はなくなったのです。24時間営業のお店のお陰で。

携帯電話の普及は「待ち合わせ」の形をすっかり変えました。「待ちぼうけ」ることなく、時間が潰せるようになりました。それはそれで、便利なのですが……。幸いなのでしょうか。考えさせられます。クリスマスの光と温もり、そして、お正月の凜とした静謐も無くなってしまったように感じています。

食卓も毎日がクリスマス、正月と化したかのようです。かつて、我が家ではカレーライスのごちそうでした。ハンバーグステーキなどは、飛び切りのハレの日、それこそ「お誕生日」だけのスペシャル・メニューです。目を輝かせて食卓についたものです。「この日、この時、ここぞ」と狙いすまして用意される「ごちそう」は、家族の絆を強め

ました。そして、再び始まる耐乏と待望の生活の活力源となりました。あの頃がなつかしいです。

キリスト教会には、信仰生活の道標としての「教会暦」があります。その新年元日はクリスマスから逆算して四つ前の日曜日。今年の場合は11月30日でした。キリスト教の暦はいきなりクリスマスではなく、それを「待つ」ところから始まるのです。今がその時、アドベント、待降節です。アドベント・クランツの4本のろうそく。待降節最初の日曜日にまず1本火を灯します。次の日曜日は2本です。4週で4本全部に火が灯れば、クリスマスを迎えます。それまで待つのです。アドベント・カレンダーの小窓。1日1つずつ、開けていきます。「まだかなあ」の思いを募らせつつ、指折り数えて待つのです。まさに「もういくつねると……」です。そのように、教会暦は「待つ」ことを教えます。旧約の詩人は「見張りが朝を待つにもまして」待ちました。わたしたちも待ちつつ望みつつ生きるのです。

天の神様、あなたのもとに、あなたと共にあった「慈しみ」と「豊かなあがない」が、地に住むわたしたちのもとに来ます。インマヌエル。神我らと共に。

M.T



今回は江戸時代の教育、とりわけ寺子屋の読み・書き・算用のレベルの高さを述べたが、今回は、日本における言語教育の問題点を取り上げてみたい。

言語とは「人間が音声または文字を用いて思想・感情・意志などを伝達したり、理解したりするために用いる記号体系、またはそれを用いる行為」と『広辞苑』にはある。

そのために、戦前の学校教育の国語教育は、①よみ方②習字③綴方 3本の授業を通し、国民としての国語力の増強をめざしてきた。戦後は、デューイ等による経験主義に基づく教育理論が採用され「児童生徒に対し、聞くこと、話すこと、綴ることによって、あらゆる環境における言葉の使い方に習熟させる

経験を与える」と改められた。その後も経験主義の理念は生き続けているが、経験を重視するあまり、知識や技能等が育っていないという指摘が相次ぎ、基礎学力をつける能力重視の方向へ移行しつつある。

本年3月に改訂された小学校学習指導要領では、国語科は、A「話すこと、聞くこと」B「書くこと」C「読むこと」の3つと定め、「知識・技能の習得と思考力・判断力・表現力等の育成のバランスを重視する」という方向が示された。

私は毎年「小さな親切」運動本部に寄せられる日本各地の小・中学生の作文審査をしてきたが、国語力の衰退を実感している。誤字を紹介すると、新切(しんせつ)、大恋(たいへん)、定度(ていど)、経駅(けいけん)、結して(決して)な

ど、堂々と書く中学生が多い。しかも応募作品の大半は「車内での座席譲り」であり、その6、7割は恥ずかしくて譲れなかった、という情けないものが多い。中には原稿用紙の使い方まで、きちんと指導している学校もあるにはあるが、きわめて少ない。

このような言語環境の乱れをくい止めるには、どうしたらよいのだろうか。

芸道の真髄は形と心にある、との古来の教えに従うなら、まず形式陶冶を重視すべきではないか。子どもたちの言葉の指導は、基本と定形を身に付けさせることが先決といえる。

いささか説明不足の箇条書きではあるが、以下のことを留意してほしい。

- ①学校の教師には、かつての寺子屋の師匠のような手本を示す人であることを望みたい。教科書さえ終えればといった安易な考え方は、してほしくない。
- ②学校では、筆記用具の持ち方、文字の形、点画の方向や交わり方を正しく教え、文章の敬体と常体の違い、段落に注意して、文章を構成する技能を身に付けさせてほしい。
- ③相手に応じて、話す事柄を順序立て、丁寧な言葉と普通の言葉、くだけた調子の違いに気をつけて話すなど、これからの言語技術を見据えた行き届いた指導を期待したい。
- ④マスコミ関係者、テレビの出演者に希望したいのは、子どもたちの視線を意識し、美しい言葉、正しい日本語を使ってほしい。そして安易な外来語はできるだけ避けてほしい。

谷 健 (たにけん) …昭和5年7月生まれ。東京都の公立小学校7校の勤務。専門は英語、道徳。道徳副読本の編集に従事。



人形制作 / 杉岡広子 <http://www.bibledollministry.com/>

## 十字架の道行き

### 【祈りの言葉】

イエスよ、あなたはカルバリの丘のふもとで、三度倒られました。救われるためでも生きるためでもなく、死の滅びに自らを委ねるためです。どうか私たちも死に向かうとき、何度でもあなたの愛で立ち上がらせてください。

### 降誕

天使は言った。「マリア、恐れることはない。あなたは神から恵みをいただいた。あなたは身ごもって男の子を産むが、その子をイエスと名付けなさい。その子は偉大な人になり、いと高き方の子と言われる」

(ルカによる福音書 1章 30～32節)

エッセイストで、日本ペンクラブ会員の三宮麻由子さんは、ある日、母がポツリと言った言葉を思います。「麻由子の目が見えなくなったとき、私はこの子を神様から預けられたんだって思ったのよ。預かったんだから、しっかり育てなくちゃね」

小さい頃から、彼女は度々不安に襲われました。目の見えない彼女を、両親は本当に愛してくれているのだろうか、本音では要らないのではないかしら。……



毎日  
あくしゅ

母が愛情を注げば注ぐほど彼女の不安は増すばかりでした。きつい言葉を発しわがままを言い、彼女は母の愛を確かめ、それを心の糧として少しずつ大人になってきました。

彼女が心のバランスを失ったとき、母が繰り返し言った言葉を思います。「親は、どの子ども世界で一番の宝物だと思っているの。要らない子どもなんて、この世に一人もないんだからね」。

子どもは、神様からお許しを頂いて生まれてきます。そして、神様が創られた大自然の中で、立派な命として育れます。だから、一人ひとりの人間の中にキリストがいて、聖霊が宿っているのです。その意味では、世界のすべての子どもたちが、キリストと同じように神の子として、地球の母親たちに託されて誕生するのです。

クリスマス物語は、天使をとおしてマリアの身に起こる出来事を、不安と惑いを持ちつつも、受け入れて行くお話です。マリアはイエスを、神からさずかったかけがえのない子どもとして受け入れていきます。クリスマスの季節、人はみな、神さまに愛されて生まれて来た子どもだということを思い起こしたいものです。

ご家族の上には素晴らしいクリスマスを心よりお祈りしています！

(園長)